

# 平安時代の類義語「あたり」「ほとり」「わたり」

——古典教材を使った語彙指導に向けて——

刀 田 絵美子

## 一 はじめに

『今昔物語集』巻二九「羅城門らせいもん登上層見死人盗人語第十八」は芥川龍之介「羅生門」（『帝国文学』初出 一九一五年）のもととなった説話としてつとに有名である。その冒頭は次の通りである。

今昔、撰津ノ国ノ邊ヨリ盗セムガタメニ、京ニ上ケル男ノ、日ノ未ダ明カリケレバ、羅城門ノ下ニ立隠レテ立テリケルニ、朱雀ノ方ニ人重ク行ケレバ、人ノ静マルマデト思テ、門ノ下ニ待立テリケルニ、山城ノ方ヨリ人共ノ数来タル音ノシケレバ、其レニ不見エジト思テ、門ノ上層ニ、和ヲ搔ヅリ登タリケルニ、見レバ髯ニ燃シタリ。

この部分を注釈書ごとと比較してみると、「撰津ノ国ノ邊」に当えられる語が次のように異なることが分かる。<sup>\*1</sup>

大系・全集・集成・新全集・読解：「ほとり」  
完訳・新大系：「わたり」

両語の記述を日本国語大辞典（JapanKnowledge 版）で確認すると、どちらも「あたり」との関連を述べていることに気づく。日本国語大辞典における三語の意味用法はおよそ次のように整理できる。

「あたり」…基準となる場所も含めた付近一帯。単独で使用可能。  
「ほとり」…基準となるものはずれ、その付近。  
「わたり」…基準となる場所も含めた付近一帯を漠然と指す。接尾的、連体修飾的に使用。

本稿では、調点資料と仮名文資料を対象として、日本国語大辞典の記述の妥当性を検討する。また、注釈書の「邊（辺）」に対する付訓「ほとり」「わたり」の違いを題材にした勤務校（比治山大学）での授業実践についてまとめる。

## 二 平安時代資料における

### 「あたり」「ほとり」「わたり」

#### 二―一 訓点資料での用法

築島裕編『訓点語彙集成』（汲古書院 二〇〇七年）二〇〇九年

を用いて、訓点資料における付訓状況を確認する。なお、本書は「平安時代後半期（一〇〇一年以後）」を中心に、九世紀から十四世紀の訓点を収めた資料である（一部、その前後の訓点も存する）。

「邊（辺）」に対しては、「アタリ カタ カタハラ ハシ ハタ  
へ ホトリ ミモト モト」の九種が収められていた。「ワタリ」は  
挙げられていなかった。

そのうち、「あたり」の全訓が付されるのは次の二例である。

① 邊（付） （千）布（山）阿（山）千（山）「法華經單字」保延二（一一三六）年

② 夢裏向渠（付）邊（付） （カ）醒（カ）酬（カ）寺（カ）藏（カ） 遊仙窟 康永三（一二三四）年

①は法華經中の漢字一字二字（單字）を出現順に並べ、反切・声点・字音注・和訓を付した資料である。「邊（辺）」の場合、当該漢字の右傍に「ホトリ」、下部に「アタリ」を記載する点が興味深い。

②は唐代に四六駢儷体で書かれた伝奇小説で、贈答詩を豊富に含む。当該箇所は女性が詠んだ詩の一部である。

「あたり」が「邊（辺）」に付訓されるのに対し、「ほとり」は、

「側」（五八例）、「邊」（三六例）、「頭」（二三例）、「上」（十九例）、「畔」（十三例）、「傍」（十一例）、「垂」（十例）、「崖」（七例）、「濱」（六例）、「垂」（五例）、「口」「岸」「湄」「首」（各三例）、「下」「次」（際）（各二例）に付訓されることが示されている。「交」「側近」「右」「旁」「測」「溪」「裔」「邊裔」「面」も一例ずつ存する。

これらは、漢字そのものがある場所における位置や境界を表しているが、その中でも特に「水辺」を表す漢字（崖・濱・岸・湄・溪）に対して、「ホトリ」と加点される点に注目したい。本稿で対象とした「邊（辺）」は、それ自身が「水辺」を表す漢字ではないが、例えば岩崎本『日本書紀』卷二四（平安中期加点）では、次のように用いることで、結果として「水辺」を表す。

③ 秋七月、東国不尽河邊（付）人大生部多、勸祭虫於村里之人

ただし、同じ資料でも「邊（辺）」が〈国の周辺〉を表す場合に「ホトリ」と付訓される場合があり、「ほとり」が必ずしも「水辺」を表す語ではないことを示している。

④ 癸酉、越邊蝦夷（付）、数千内附。

#### 二―二 仮名文資料での用法

次に、仮名文資料について検討する。ここで仮名文資料を取り上げるのは、本稿冒頭に紹介した今昔物語集卷二九が仮名文（和文）を依拠資料として成立したと考えられる本朝世俗部に収録されてお

り、平安初中期仮名文の語彙との親和性を有していると考えられるためである。

本稿を作成するにあたり、国立国語研究所のコーパス検索アプリ「ケーション」「中納言」(Ver.2.3)を利用して、「日本語歴史コーパス」における平安時代仮名文の「あたり」「ほとり」「わたり」の用例数を確認した。一般的に考えられている資料の成立順に並べてみる。

【表】 仮名文における「あたり」「ほとり」「わたり」の使用

資料名	「あたり」	「ほとり」	「わたり」	備考
竹取物語	7例	0例	0例	三語とも使用 914年頃～951年頃成立の資料群
古今和歌集	5例	15例	1例	
土佐日記	1例	5例	2例	
伊勢物語	2例	6例	3例	
大和物語	2例	1例	9例	
平中物語	2例	0例	3例	
蜻蛉日記	4例	0例	12例	
落窪物語	6例	0例	2例	
枕草子	4例	0例	7例	
源氏物語	164例	0例	135例	
紫式部日記	3例	0例	10例	
堤中納言物語	3例	0例	10例	
更級日記	1例	0例	2例	
大鏡	5例	0例	2例	
讃岐典侍日記	1例	0例	2例	

「あたり」「わたり」のみを使用  
（「ほとり」不使用）  
960年頃～1109年頃成立の資料群

その語を用いるかどうかは、当該語を用いるべき場面・文脈を有しているか、あるいは資料の語彙量も関係するだろう。【表】で興味深いのは、「あたり」「ほとり」「わたり」の三語を用いる資料と、「あたり」「わたり」を用い、「ほとり」を用いない資料に時代差があるように見えることだ。平安時代仮名文の最大語彙量を誇る源氏物語においても同様で、「ほとり」は用いられず、「あたり」「わたり」はそれぞれ百例以上用いられる。これをどう考えればよいか。

二―で確認したことと結びつけると、「ほとり」は漢文を訓読する場合には用い、仮名文(和文)では用いられない。逆に、「わたり」は漢文を訓読する場合には用い、仮名文(和文)では用いられないと整理できる。これは、いわゆる「漢文訓読語」と「和文語」の概念で捉えられるように見える。

ただし、竹取物語を例外として、古今和歌集から大和物語まで、つまり成立年代が揺れる資料はあるものの、調査した範囲の資料では、九五〇年頃までに成立した仮名文で「あたり」「ほとり」「わたり」の三語が使用されている。これらの資料において、三語はどのように使い分けられていたのだろうか。意味用法以外の側面で使い分ける理由が存在したと考えることができるかどうか、土佐日記、伊勢物語、大和物語の用例を検討し、三語の意味用法を考えてみる。

(1) 土佐日記

「あたり」一例、「ほとり」五例、「わたり」二例が用いられる。

土佐日記は、表現内容の性質上、「水辺」に関連する場所と結びつきやすいと考えられる。まず、「あたり」の例を示す。

①十三日の曉に、いささかに雨降る。しばしありてやみぬ。女かれこれ、沐浴などせむとて、あたりのよろしきところを下りて行く。

土佐日記では、「あたり」は抽象的な、漠然とした場所を表す語として用いられる。これに対して、「ほとり」「わたり」は、具体的な場所を表す語として使用される。

②上、中、下、酔ひ飽きて、いとあやしく、潮海のほとりにてあざれあへり。

③かくて漕ぎ行くまにまに、海のほとりにとまれる人も遠くなりぬ。船の人も見えずなりぬ。

④八日。なほ、川上りになづみて、馬飼の御牧といふほとりに泊まる。今宵、船君、例の病おこりて、いたく悩む。

⑤ここに、相応寺のほとりに、しばし船をとどめて、とかく定むることあり。この寺の岸ほとりに、柳多くあり。

⑥さて、池めいて窪まり、水つけるところあり。ほとりに松もありき。

何の「ほとり」かに注目すると、「ほとり」が水辺（海の「ほとり」）であることが読み取れる。⑤では「岸ほとり」という語が見られるが、日本国語大辞典・古語大辞典では、これを「きしべ（岸辺）と同じ」とする。ただし、土佐日記の当該箇所以外に使用例が見えたらず、当時の一般的な語彙かどうかは不明である。なお、土佐日記では、「ほとり」に前接（あるいは後接）する他例を見ない。

一方、「わたり」は、もう少し広い範囲を表す地名と結びつき、「ほとり」よりも広い範囲を指しているように見える。

⑦二十三日。日照りて、曇りぬ。このわたり、海賊の恐りあり、といへば、神仏を祈る。

⑧石津といふところの松原おもしろくて、浜辺遠し。また、住吉のわたりを漕ぎ行く。

## (2) 伊勢物語

「あたり」二例、「ほとり」六例、「わたり」三例が用いられる。

①君があたり見つつを居らむ生駒山雲なかくしそ雨は降るとも

②むかし、そこにはありと聞けど、消息をだにいふべくもあらぬ女のあたりを思ひける。

①は、大和国から河内国高安に向かう男がいるであろう場所を指しており、土佐日記①と共通する漠然とした場所を指す用法である。それに対して、②は「女の身辺の意で、女のことを漠然とさしている」（新全集頭注）用法で、場所を指しているわけではない。<sup>3</sup>

これに対して、「ほとり」「わたり」は、やはり具体的な場所を示す語と共起して使用されている。その中でも、「ほとり」は水辺（沢・河・海）と共起する。

③そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわ

たせるによりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木のかけにおりゐて、かいいひ食ひけり。

④なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国とのなかにいと大きな河あり。それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれゐて、思ひやれば、かぎりなく遠くも来にけるかな、とわびあへるに、渡守、「はや船に乗れ、日も暮れぬ」といふに、

⑤むかし、左のおほいまうちぎみいまそがりけり。賀茂河のほとりに、六条わたりに、家をいとおもしろく造りて、すみたまひけり。

⑥親王のたまひける、「交野を狩りて、天の河のほとりにいたる、を題にて、歌よみて盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭よみて奉りける。

⑦この男、なま宮づかへしければ、それをたよりにて、衛府の佐とも集り来にけり。この男のこのかみも衛府の督なりけり。その家の前の海のほとりに、遊び歩いて、「いざ、この山のかみにありといふ布引の滝見にのぼらむ」といひて、のぼりて見るに、その滝、ものよりことなり。

⑧むかし、男、親王たちの逍遙したまふ所にまうでて、龍田河のほとりにて、ちはやぶる神代も聞かず龍田河からくれなゐに水くるとは

「ほとり」が水辺に関係する表現と共起するのに対して、「わたり」は全例が京都の東西区画を示す「条」と共起する。また、語られる場所を特定していく「わたり」の性質からか、各章段の冒頭に用いられる。これは「わたり」に限らず、「ほとり」の一部でも見られる

が、「わたり」は全例がこれに該当する。

⑨むかし、男ありけり。東の五条わたりに、いと忍びていきけり。

⑩むかし、男、五条わたりなりける女を、え得ずなりにけることとわびたりける、人の返りごとに、思はず袖にみなどのさわぐかなるもろし船のよりしばかりに

⑪むかし、左のおほいまうちぎみいまそがりけり。賀茂河のほとりに、六条わたりに、家をいとおもしろく造りて、すみたまひけり。

伊勢物語の例で興味深いのは、第八一段冒頭(⑤⑪)である。ここでは「ほとり」を使って南北の場所を示し、次に「わたり」を使って東西の場所を示すことで、左の大臣(源融)の邸宅「河原院」の場所を特定していく。このような表現方法が用いられることで、ほんやりと京都の地図を俯瞰していた読者の思考を、焦点化していく効果があるだろう。

### (3) 大和物語

「あたり」二例、「ほとり」一例、「わたり」九例が用いられる。

①南院の七郎君といふ人ありけり、それなむ、このうかれめのすむあたりに、家つくりてすむと聞しめして、それになむ、のたまひあづけたる。

②さて後の宮、春宮の女御と聞えて大原野にまうでたまひけり。御ともに上達部・殿上人いとおほく仕うまつりけり。在中将も仕う

まつれり。御車のあたりに、なま暗きをりに立てりけり。

①は亭子帝(宇多天皇)が鳥飼院に遊んだ時に氣に入つた「うかれめ」のすむ「あたり」に「南院の七郎君」の家があり、という文脈である。それがどこかは示されず漠然としているとともに、ここです唐突に現れる「南院の七郎君」も源清平(本朝皇胤紹運録)か英我王(尊卑分脈)か、「系図」によつて違い、確実なことがいえない(新全集頭注)人物で、あえて人物や場所を曖昧にすることで、虚構性を強調する意図があるのかもしれない。

②はこれまでの例には見られない用法である。これまでは場所や地名を表す語と共起していたが、それらに比べると指し示す範囲が小さく限定的である。

次に、「ほとり」の例を挙げる。大和物語でも、やはり水辺を表す語と共起する。

③いというあはれがりたまひて、沓のほとりにおほみゆきしたまひて、人々に歌よませたまふ。

それに対して、「わたり」は地名と結び付く用法が多い。

④野大弐、討手の使に下りたまひて、それが家のありしわたりをたづねて、「檜垣の御といひけむ人に、いかではむ。いづくにかすむらむ」とのたまへば、「このわたりになむすみはべりし」など、ともなる人もいひけり。

⑤亭子の帝、鳥飼院におはしましにけり。例のごと、御遊びあり。

「このわたりのかれめども、あまたまゐりてさぶらふなかに、声おもしろく、よしあるものは侍りや」と問はせたまふに、

⑥津の国の難波のわたりに家してすむ人ありけり。あひ知りて年ごるありけり。

⑦難波に祓へして、かへりなむとする時に、「このわたりに見るべきことなむある」とて、「いますこし、とやれ、かくやれ」といひつづ、この車をやらせつ。家のありしわたりを見るに、屋もなし人もなし。

⑧内舍人なりける人、おほうわの御幣使に、大和の国に下りけり。

开手といふわたりに、清げなる人の家より、女どもわらはべいで来て、このいく人を見る。

⑨また、おなじ使にさされて大和へいくとて、开手のわたりに宿りゐて見れば、前に井なむありける。

⑩良岑の宗貞の少将、ものへゆく道に、五条わたりにて、雨いたう降りければ、荒れたる門に立ちかくれて見入るれば、五間ばかりなる檜皮屋のしもに、土屋倉などあれど、ことに人など見えず。

以上、土佐日記、伊勢物語、大和物語の用例から左の結論を得た。

「あたり」

漠然とした場所を指す。単独でも使用されるが、連体修飾的にも用いる。

「ほとり」

具体的、限定的な水辺に関係する場所を指す言葉と共起する。

「わたり」

「ほとり」より広い場所を指すことと共起する。連体修飾的に使用される。

右より、三語に存在した意味用法上の区別がうかがえる。なぜ、十世紀中頃以降、仮名文資料において「ほとり」が用いられなくなったのか。同時代の訓点資料で「わたり」が用いられない理由とあわせて検討する必要がある。また、古本説話集や宇治拾遺物語といった今昔物語集に続く説話集では「ほとり」が用いられている。その理由についても、稿を改めて考えたい。

### 三 類義語「ほとり」「わたり」を用いた授業実践

#### 三一 受講生の実態

稿者が所属する比治山大学言語文化学科は定員一二〇名、二年次に進む段階で、学生の希望に応じて日本語文化コースと国際コミュニケーションコースに分かれる。様々な入試形態が設定されており、入試の段階で古典が課されるのは一般入試の一部であるため、入学後、様々な学習歴を持つ受講生が同じ授業を受講することになる。

このような学生の実態を踏まえ、授業では（いちいち確認しないまでも）現代語訳を本文下にプリントしたり、内容把握につながる適切な範読（解説）、必要に応じたICT機器の活用など、「学修」に向かうための構えづくりや環境整備を丁寧に行うよう心がけてい

る。また、課題を出す場合は、できるだけ具体的に作業内容を指示し、作業に必要な基礎資料を図書館内で別置してもらうなどの工夫が必要である。

さて、以下に紹介する「日本語研究Ⅱ」（二年後期開講）は、今昔物語集をテーマに授業を行っている。二〇一七年度は第一回と第二回に今昔物語集巻二九第十八話を取り上げ、「邊（辺）」の付訓について、調査に基づく考察を体験する活動を行った。

#### 三一 授業の展開

##### （一）導入部分

第一回目の授業であったため、授業内容や評価方法、対象作品などを説明した上で、「古典」テキストの成立過程について解説した。その際、今昔物語集巻二九第十八話の影印、それを底本とする二種類の注釈書（『新日本古典文学大系 今昔物語集』および『新編日本古典文学全集 今昔物語集』）、さらにそれに基づく教科書（『徒然草 枕草子 説話』（教育出版 平成十四年検定済み））を示した。次に、影印を用いて中世前期の片仮名を解説し、次の展開（類聚名義抄・色葉字類抄の翻刻や日本語史上の課題探求）に繋がるようにした。

##### （二）展開部分

教科書と注釈書を比較し、教科書作成時にどのような変更が行われているか、教科書と注釈書の違いを個人で探した後、ペアで確認した。また、五～六人のグループを作り、問題点を共有した。

この間、授業者は机間指導を行い、学生の質問に答えたり、個人・ペア・グループ活動中に見つかる相違点を日本語史上の課題として全体に投げかけたりして、交流が活発に行えるよう配慮した。

一連の活動を通して、個人では課題が見つけれない受講生も、注釈書から教科書を作成する過程で、漢字そのものが変更されたり、歴史的仮名遣いに合致するよう送り仮名が変えられたりすることなど、今後の授業で取り上げるテーマを自分たちの気づきとして受け取ることができる。本時は、特に「邊(辺)」に資料間で異なる振り仮名が付されていることに気づくことができるよう、授業を展開した。

### (3) 終末部分

各グループから出された相違点をまとめ、日本語史上の問題として問い直した後、次の課題について説明し、授業を終えた。

#### 《課題》

中型以上の規模の国語辞典を用いて、「わたり」と「ほとり」の意味・用法を調べて記しなさい。また、辞書での調査を踏まえて「今は昔、摂津の国のほとりより」の方がよいか、「今は昔、摂津の国のわたりより」の方がよいか、自分の意見を述べなさい。

#### 注意点

- ① 調査した辞書名は、『』に入れて、最初に示すこと。
- ② 複数の辞書を調査してよいが、その場合は、辞書名の前にナンバリングすること。

③「説得力のある説明」になるよう、自分の意見を順序立てて、しっかりと記述すること。

### 三―三 課題に対する受講生のレポート

第二回目では、授業者が指定したグループに分かれ、各自の意見を交流した。その後、グループごとに「ほとり」「わたり」のいずれがふさわしいか、その理由をまとめ、発表する活動を展開した。<sup>\*4</sup> 授業終了後、レポートを回収するとともに、各人が記入・提出する学修記録によって、受講生の反応を確認した。以下、受講生のレポートをいくつか紹介したい。

A 辞書を調査した結果、『カラー版 日本語大辞典』では「ほとり」と「わたり」の意味が似ているものの、『日本国語大辞典』では異なる点があることが分かった。「ほとり」は端や川・海などのさわやふちの意味が強く、場所を特定することができる。だが、「わたり」はある場所のそこを含めた付近という意味が強く、場所が特定しにくい。今回の文は、「摂津の国のあたり」という意味が適していると判断し、私は「わたり」を使う方がよいと考えた。

▼二種の辞書を引き、特に『日本国語大辞典』の用例を丁寧に読み込んでいる。他の科目でも『日本国語大辞典』の用例まで読むよう指導されているので、この受講生の場合それはそれがうまく論の組み立てに活用できている。

B 私は「ほとり」が適切だと考える。「ほとり」には「あたり」



「そば」の他に「片田舎」や「縁故の者」という意味もあり、「摂津ノ国ノ辺ヨリ盜セムガ為ニ京ニ上ケル男ノ」とあるように、男が都へ上ってきたのならば、「あたり」「付近」という意味しかない「わたり」よりも「かたいなか」「縁近」の意味も持つ「ほとり」の方が、男が自分の土地を離れてはるばる都へやってきたという状況がよく伝わりと感じたからである。まだ交通機関が発達していなかった状況の中で、摂津の国から朱雀大路まで行くことは決して簡単ではなかったはずである。盗みをする、という目的の背景に何があったのかは書かれていないが、盗みをしなればならないほどの理由があつて、摂津国から都にやって来た可能性を考えると、「わたり」と読んで「その付近」「そのあたり」という意味で片付けてしまうよりも、「ほとり」と読んで「都から遠く離れたところ」「縁近」という意味を持たせる方が適切ではないだろうか。

▼Aと同じく二種の辞書を引き、そこに示された意味記述から論を構成した。その際、いわゆる「下人」の背景に寄り添って考えようとした点がグループ交流および発表の際に他の受講生から評価された。

C 今回問題となった羅生門の注釈書（新日本古典文学大系）と教科書では「わたり」を使い、新編日本古典文学全集では「ほとり」が使われている。ここで「摂津国」が取り上げられている点に注目する。「摂津国」は現在の大阪府北部と兵庫県の東南部の地域のこと、男がそこから目指したのが京である。つまり、都である京からは遠い場所から向かうということなので、私は「今は昔、

摂津の国のほとりより」の方がよいと考えた。

▼地理的な観点から論を構成しようとした受講生が複数いた。この受講生は説得力のある意見にするため、最初に引いた『広辞苑』以外に、『学研国語大辞典』『国語大辞典 言泉』『古語大辞典』を引き比べ考察した。

D 私は「摂津国のわたりより」の方がよいと思う。なぜなら、『日本国語大辞典』の補注に書いてある通り、「あたり」が基準となる場所も付近もさしている言葉だからだ。また、『日本国語大辞典』によると、「あたり（基準とする所から近い範囲。わたり）」は平安時代まで、「わたり」とほぼ同じ意味として用いられている。そして、この男は、摂津から来たのか、摂津付近から来たのかははっきりしていないので、すべてを含んでいる「わたり」という言葉の方がよいと思った。

▼この受講生は課題に挙げていない「あたり」も日本国語大辞典で調査した。授業者から提示された課題から新しい問題を見出し、自分の考えをまとめた点が評価できる。

交流活動のまとめとして行った発表では、「ほとり」派と「わたり」派の意見が六対六と拮抗した。どのグループも、意見の根拠・理由をしっかりと示そうとし、聞き応えがある発表になった。こちらが想定していなかった、説話内容に入り込んだ根拠・理由を述べるグループもあり、ことは研究する姿勢や態度をいかに身につけていくか、という新たな課題に気づかされる活動になった。

## 四 おわりに

本稿では、「あたり」「ほとり」「わたり」の意味用法と、それを用いた授業実践について述べた。ただし、「あたり」「ほとり」「わたり」の意味用法については、特に十世紀中頃以降の仮名文資料での棲み分けが明らかにできていない。引き続き検討したい。

授業実践については、語彙力をどう付けていくかという問題に関連して高等学校でも応用可能な内容だと考え、本稿にまとめた。このような活動は、中央教育審議会「国語ワーキンググループ」における審議の取りまとめについて（報告）（平成二八年八月）でまとめられている、一般社会で「国語科において育成する必要があるとされる能力」、すなわち「物事を多面的・多角的に吟味し見定めていく力（いわゆる「クリティカル・シンキング）」や、情報活用能力、質問する力、メモを取る力、要約する力」の醸成とも関連するだろう。読者の日々の実践と響き合うところがあれば幸いである。

### 【注】

- \*1 本稿で確認した注釈書は次の通りである。大系（日本古典文学大系）・全集（日本古典文学全集）・完訳（完訳日本の古典）  
新大系（新日本古典文学大系）・新全集（新編日本古典文学全集）・集成（日本古典文学集成）・読解（今昔物語集読解）
- \*2 竹取物語の「あたり」七例は、竹取翁宅の近辺を指す例が五例（地の文 四例、会話文 一例）が最も多い。これは、日本

国語大辞典「あたり」の意味用法（1）「基準とする所から近い範囲」で、「わたり」と共通する用法である。それに対して、翁に作り話をする庫持皇子の台詞「金、銀、瑠璃色の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋わたせり。そのあたりに照り輝く木ども立てり。」は「ほとり」とするよりも、枝の出自（焦点）を曖昧にする効果があったと考えられる。「焦点を曖昧にする効果」については、阿倍右大臣に対する「唐にをる王けい」からの返事「もし、天竺に、たまさかに持て渡りなば、もし長者のあたりにとぶらひ求めむに。」に対して新全集が「漠然とさせるためにいった。長者の館だけを確かと指定したのではなく、漠然と一例を挙げたのである」と注釈を付けており、「あたり」の意味用法の一つであると考えられる。

\*3 日本国語大辞典では、当該例を「あたり」の用法（3）（イ）「場所についていう」例としているが、諸注釈書にしたがい、用法（3）（ロ）「人についていう」例と解釈した。

\*4 実際の授業では、「ほとり」「わたり」についての活動を前半に行った後、注釈書の付訓の根拠である類聚名義抄の解説など、別の活動に移った。

（比治山大学）